

令和7年度 第3回 宇治市乳幼児教育・保育推進協議会会議録

日 時 令和8年3月9日（月） 午後6時～午後7時45分

場 所 宇治市役所 8階 大会議室

出席者

委 員 佐川会長、杉本一久副会長、松井委員、坂本委員、篠原委員、
杉本俊恵委員

事務局 松村市長、木上教育長、福井教育部長、川崎同部副部長、
武田教育総合推進センター長、安留学校教育課長、岩崎学校教育課主幹、
中村ひがしうじ幼稚園主幹
波戸瀬福祉こども部長、雲丹亀同部副部長、松井同部副部長、
栗田保健推進課長、畑下同課副課長、岡同課主任、小倉同課主任、
春田同課主任、畑保育支援課長、鶴谷乳幼児教育・保育支援センター主幹、
垣見乳幼児教育・保育支援センター主幹

会議内容

1 開会

- ・会長より開会挨拶
- ・事務局より会議の成立報告

2 検討

- ・会長より、前回の振り返りと本日の会議の趣旨について確認

（1）専門部会からの報告事項に対する検討

ア 研究・研修専門部会

会 長： それでは、まず研究・研修専門部会について、私からご報告をさせていただきます。お手元の資料「研究・研修関連」の1ページをご覧ください。

本専門部会は、令和8年1月30日に開催いたしました。研修計画に対し、委員の皆様から非常に率直かつ活発なご意見をいただきました。下線部の内容を中心に報告いたします。

まず、研修・研究事業については、「研究結果の発表を公開保育として実施するだけでなく、研究の過程に他園の保育士等が参加できる仕組みを取り入れ、往還的に取り組む事業としたい」といったご意見や、「保育の振り返りにおい

て、クラスごとの画像や動画を活用し、担任が保育の様子を説明しながら研修を行う形式も有効ではないか」との提案がありました。他園の先生方が集まる研修において、「画像等を用いれば、子どもの様子が写ってなくても園の環境がどうなっているかを確認できる」といった点や、「現状のエピソードを持ち寄る研修に加え、動画を用いる方がより分かりやすいのではないか」などのご意見が出ております。

また、小学校の研究会で実施されているような「学級運営を円滑にするための小ネタや工夫を紹介し合い、先生同士が情報交換をする時間」については、先生方にとって面白い発見や楽しみにつながっていることから、乳幼児教育・保育の研修でも取り入れてはどうか、とのアイデアも多数出されました。

内容につきましては、「保育と食育は関わりが深い」という観点から、「食育をテーマにしたエピソードを持ち寄り、保育を語り合う研修も検討してはどうか」といった意見もありました。

研修形式については、以前よりオンデマンド等の活用も検討されておりましたが、やはり「対面研修の方が熱量や言葉のニュアンスが伝わりやすく、顔の見える関係性が築きやすい」という点についても改めて確認されました。

まとめとして、次年度に向けては以下の方向性を参考にしてまいります。

写真や動画を持ち寄り、保育エピソードや事例を共有したり、保育環境について語り合ったりするような、具体的な研修を設定する。今年度取り組んだ「往還型」の研修形態を、令和8年度も実施できるよう検討する。各研修が大きなテーマに沿った「一体的な研修」となるよう構成を工夫する。日頃の保育で工夫している具体的な情報交換の時間を設定し、実践に活かしつつ、先生同士の「顔の見える関係作り」に努める。以上の意見を参考に、事務局にて「令和8年度宇治市乳幼児教育・保育協働研修年間計画案」を作成いたしました。私からの報告は以上となります。続けて、事務局より資料の詳細な説明をお願いいたします。

・事務局より、資料に基づき説明

会 長： では、まず研究・研修専門部会にご出席いただいた副会長及び委員の方より、補足があればお願いいたします。

副会長： 非常に活発で、本音で意見交換ができた時間でした。先ほど会長からお話がありました通り、「一日一日の具体的なこと」に目を向けることは、私たちの立場である「こどもを真ん中に」という考え方を象徴しているように思います。また、小学校の先生からお聞きした「小ネタ」のお話など、他職種の先生方の取組や姿を初めて垣間見ることができ、そうした交流こそがイキイキとしたつながりだと感じました。非常に有意義な時間でした。

委員： 副会長がおっしゃった通り、回を重ねる中で、私たちが抱える問題や課題を思考として深く共有・共感し合える、とても良い会となりました。研修計画につきましても、対象となる先生方が明確に提示されており、非常に丁寧で素晴らしい計画を立てていただいたと感じております。多くの方がこの研修に参加し、顔の見える関係が一層深まることを願っております。来年度も共に努力してまいりたいと思います。

会長： ありがとうございます。委員がおっしゃる通り、開催時期や時間帯などの課題はございますが、多くの先生方に学んでいただけるのが良いと思います。研修については「みんなで創ろう！『こどもまんなか』研修」と「知りたい・知ってほしい研修」の2つに分け、グループワークを通じて互いの知恵を共有できる場を目指します。その他の委員はいかがでしょうか。

委員： 会長が解説された通り、日々の悩みを解消する研修と、新しい学びを得る研修とがバランスよく組み込まれていると感じております。

会長： それでは、今の報告を受けまして、他の委員の方からも、来年度の研究・研修計画についてご意見をいただけますでしょうか。

委員： 今年度、ひがしうじ幼稚園が協力園としてどのように進むかと思いながら参加いたしましたが、ネーミングが分かりやすく具体的になっており、参加意欲をそえられる内容だと感じました。参加した先生方が「ためになった」と実感できれば、次年度以降の継続にもつながると思います。無理をしてでも参加したいと思えるような魅力的な研修会になると良いですね。

会長： ひがしうじ幼稚園の先生には4歳児クラスで年に3回も公開保育を行っていただき、深い議論の機会をいただきました。心より感謝申し上げます。今後も、公開園に負担をかけすぎない形で、有意義な往還型研修を続けていきたいと考えております。

委員： 皆様のご意見を広く取り入れた、素晴らしい研修案になっていると思います。昨年度の「互いを知る」段階から、今年度は「互いを深め合える」内容へと進化していると感じます。多くの方が参加できるよう、時期についてもご配慮いただければ、より良いものになると考えます。

会長： ありがとうございます。事務局がネーミングを含め、現場の意見を次年度へ反映させてくれたことを大変心強く思っております。他に補足等はございません。

んでしょうか。

事務局： 研修について大変深く掘り下げていただき、保育教諭、幼稚園教諭、保育士といった様々な職責を踏まえた良い体系ができたと思います。宇治市内で開催できることは参加者にとってもメリットが大きいです。今後は「研究」の側面として、ギフテッド児の受け入れ等、園で具体的にどう取り組むべきかというテーマを共有し合う一歩になれば幸いです。

会 長： 実践研究園での取り組みも含め、研究を深めてまいります。なお、「みんなで創ろう！『こどもまんなか』研修」の講師につきまして、関係発達を専門とされる京都教育大学の榊原久直先生に打診しております。他職種連携にも造詣が深く、専門家同士の連携についても有益なコメントをいただける先生ですので、情報提供させていただきます。

イ 保幼小連携専門部会

部会長： お手元の資料「保幼小連携関連」の１ページをご覧ください。令和７年１月２４日および８年２月９日に開催した専門部会の報告をいたします。

まず連携・交流事業につきまして、今年度も全てのブロックで取組を行うことができました。部会では、「打ち合わせを短時間で負担なく行うこと」「既存のカリキュラムに交流を組み込む方向性」「園バスがない施設等の移動時間や距離の問題」などが課題として挙がりました。「子どもの興味を起点とする活動である以上、年度初めに交流日時を決めることの難しさ」についても懸念が示されました。

また、センターにて「架け橋期のカリキュラム作成の手引き」を改訂し、QRコードによる簡易なアクセスを実現しました。この「カリキュラム」という名称についても検討を行い、「教育的で固い」とのご意見から、「プログラム」「架け橋」「つながり」「宇治」といった言葉を用いた名称案が挙がっております。本日の検討事項として、皆様のご意見を伺いたいと思います。

提案といたしましては、次年度も同様に専門部会を設置し、ブロックでの無理のない連携手法や、チラシ等による周知活動に引き続き助言を行っていくこととしております。私からの報告は以上です。事務局より資料の詳細な説明をお願いいたします。

・事務局より、資料に基づき説明

会 長： 専門部会に出席された委員の方から補足があればお願いいたします。

委員： 第2回、第3回と部会を開催し、各ブロックでの具体的な交流事例や、進め方についての意見交換を行いました。皆様の考えをしっかりとまとめていただけたと思います。名称についても白熱した議論がございました。

委員： 一点気になった点がございます。資料15ページからの「交流事業等様式集」ですが、内容からして「実践事例集」という名称の方が適切ではないでしょうか。また、名称検討については「プログラム」というニュアンスが良いかと感じておりましたが、文科省が全体像を「架け橋プログラム」としている点を考慮し、それと区別できる名称が望ましいと考えております。

会長： 確かに「実践事例集」の方が参考にしやすいですね。気づかずに失礼いたしました。他の委員の方からご意見はございますか。

委員： 各ブロックでの様々な取組、大変興味深く拝見いたしました。年度当初に遊びの展開を予測して計画を立てることの難しさは、現場としてまさに同感です。プール遊びや自然物を使った交流など、無理のない内容で季節に沿った計画を立てていくのが良いと考えます。カリキュラムの名称については、混乱しないよう短くて覚えやすいものが良いですね。

副会長： 6ページに掲載されている「架け橋ブロック」の写真についてですが、こちらはイメージ写真でしょうか。あまりに行儀よく手をつないでいる構図でしたので、宇治市内の園や小学校の実際の様子が見えるような写真であれば、より親しみや手触り感が出るのではないかと感じました。私たちの手で作り上げているという実感が伝わる取組にしていきたいですね。

また、実践事例集への写真掲載についてですが、園側としてはよく分からない部分もあるものの、小学校側には写真の使用に関する様々な規定があるかと存じます。そのあたりの難しさについても、私たちも十分に共有しながら検討していく必要があると考えております。

名称についてですが、「カリキュラム」という言葉を使用すると、教育課程という狭義の意味に引っ張られ、就学前の保育課程とギャップが生じてしまう懸念があります。プログラムと呼ぶにせよカリキュラムと呼ぶにせよ、全体の活動を指すものであるという説明が添えられていると良いと感じます。ネーミングについては、これが起点となりますので、未来に可能性を閉ざさない柔軟なものにしたいですね。成長が萎んでしまうような名前にならないことを願います。

あと、これは一部の意見ですが、「架け橋」という言葉に対して「ギャップがあるから架け橋が必要なのだ」という批判的な声も耳にします。「虹の架け橋」のように、夢と希望に満ちたものだとなんが解釈できれば良いのですが、

そうした意見もあるということもお伝えしておきます。

会 長： 様々なご意見をありがとうございます。他にご意見のある方はご発言ください。センターの方、いかがでしょうか。

事務局： 写真の件ですが、現在はサンプルとして使用可能な写真を選定しております。今後は実際の活用にあたり、先生方のご懸念の通り、写り込み等にも十分配慮しながら進めてまいります。また、先ほどご指摘いただいた15ページの「実践事例集」への修正につきましては、確認が漏れておりましたので、速やかに修正させていただきます。

会 長： 写真については、背中からのショットや手元、対象に興味を持って覗き込んでいる様子など、顔が写っていなくても子どもの興味関心を示せる写真はたくさんあるかと思います。撮影者の選択眼で、より伝わるものにしていきましょう。

さて、「宇治市版架け橋期のカリキュラム」の名称についてですが、これから未永く使うことを考慮し、短くて覚えやすく、愛着の持てる名称を模索したいと考えております。最近の「スタカリ（スタートカリキュラムの略）」のように略称になじむようなものも良いかもしれません。プログラムという名称にする場合、カリキュラムとの違いをどう整理するかという課題もあります。具体的に良い案はございますでしょうか。

委 員： 名前を全員一致で決定するのは大変難しいことだと感じております。ただ、部会員からは「架け橋」という言葉が既に馴染んでおり、話し合う際にも「架け橋」と言えば「そのことね」と通じるようになっていくという現状がございます。「架け橋」という言葉が持つ多様な解釈の中には、非常に美しく前向きなイメージもございます。

その上で、宇治市が取り組んでいるということを加味し、「宇治の架け橋プログラム」のように「宇治の～」と冠を付ける方が、ネーミングとして洗練されているのではないかという意見が出ておりました。また、長すぎると覚えにくいので、短いものが好まれる傾向にあります。

「宇治の架け橋鳳凰プログラム」や「宇治っ子あそびわくわくチャレンジ」といった案は、部会員がそれぞれ持ち寄ったものです。宇治橋を連想させるような地理的な背景も含め、「宇治の架け橋」という言葉は、子どもたちの教育をつなぐ出会いの場として非常に象徴的ではないかと考えております。

副会長： 「宇治の架け橋プログラム」は使いやすさにはありますが、少し面白みに欠ける気もいたします。もっと親しみやすいものとして、例えば「うじっちゃん架け

橋プログラム」など、代わりの案として挙げておきます。

会 長： 「架け橋」は残しつつ、「わくわく」のような前向きな言葉を組み合わせるのも良いですね。個人的には「宇治」という地名が入っていると、地域として連携している姿勢が伝わりやすいと感じます。「宇治っ子」という言葉もチラシに使っておりますので、定着しているかもしれませんね。

事務局： 文科省が用いる「プログラム」は、幼児教育と小学校のスタートカリキュラムを総称する形となっておりますので、「架け橋期プログラム」という名称は文科省の方針とも合致していると考えます。「宇治っこ架け橋プログラム」といった名称には宇治の子どもたちへの想いが込められていると感じます。

会 長： 保幼こ小連携専門部会の際に、名称案についての議論の深まりはいかがでしたでしょうか。

委 員： 議論の過程で「わくわく」といった案も出ましたが、まずは「架け橋」という言葉が定着している現状を尊重する形でした。また、「宇治っ子」という言葉は親しみやすい反面、市外へ就学する子どもを含めた場合に限定的ではないかという意見もございました。「わくわく」という言葉については、名称に入れることよりも、内容自体が子どもたちにとってわくわくするものになるよう検討していく方向性で合意しております。

会 長： 皆様、ありがとうございました。名称については「架け橋」を軸にしつつ、本日のご意見を参考に、事務局にて再度検討していただくという形でよろしいでしょうか。

事務局： 承知いたしました。いただいたご意見を基に検討させていただきます。

ウ 発達・子育て支援専門部会

部会長： それでは発達・子育て支援専門部会の報告をいたします。（１）専門職による園訪問支援については、「周知が不足している」「専門職のアドバイスが助かった」「継続的な支援がありがたい」といった声があり、センターにてチラシを作成し、周知強化を図っております。

（２）移行支援シートにつきましては、「項目が整理され書きやすくなった」「宇治市統一様式なので説明しやすい」と好評です。研修を通じて活用イメージを深め、子どもの育ちの物語として活用されるよう願っております。

（３）今後の課題としては、乳幼児期からの性教育や、専門職同士のネット

ワーク構築、子どもを比較するのではなく個々の安心を育てる発達観の共有などが挙がっています。

(4) 次年度に向けた提案として、専門部会を継続し、支援を要する子どもや保護者への対応力の向上、園組織としての振り返りの重要性などについて検討を深めていきたいと考えております。

私からは、次年度への問いかけとして「発達の教育と生成の教育」という視点を提供させていただきました。子どもが環境との出会いを遊びに変えていくための「安心の基地」としてのセンター機能、そして生涯学習としての学びの場として発信を続けていければと思います。

・事務局より、資料に基づき説明

会 長： ありがとうございます。同じくご出席された委員の方から補足をお願いいたします。

委 員： 2回目・3回目の部会では、皆様が共通の悩みを抱え、子どもたちが安心して過ごせる居場所を作りたいという願いを共有できた有意義な時間でした。センターが窓口となって専門機関へ繋いでいただける体制は、現場として非常に心強いです。

また、移行支援シートも、最初はハードルが高く感じられましたが、活用する中で「これなら書ける」「見やすくて便利だ」と実感される先生方が増えてきています。市内で様式を揃えることは、小学校への連携においても大変有意義だと感じております。

会 長： ありがとうございます。窓口としての機能が充実してきているようですね。それでは、その他の委員の方からはいかがでしょうか。

委 員： 宇治独自の様式は大変詳細で、発達的な側面がよく分かるため、小学校へ引き継ぐ際にも非常に役立っております。以前、市外転出する子どものアセスメントを作成する際に、情報が少なく困った経験がございますので、このような統一様式があることは、客観的な情報提供という面でも非常に大きな意義があると感じております。

委 員： 園訪問支援につきましても、移行支援シートにつきましても、専門部会で丁寧な議論を重ねて進んでこられたことは、非常に素敵なことだと感じております。移行支援シートについては、保護者向けへの周知が必要であるという意見も出ておりましたが、保護者の方々だけでなく、それらに関わる全ての関係者にしっかりと周知していくことが大切ではないかと考えております。

委員： 皆様がおっしゃることと重複いたしますので、私も同様の思いであることをお伝えいたします。専門職による園訪問支援につきましては、本資料の5ページにある図が非常に興味深いと感じております。センターと園、そして専門職がどのような関わりの中で話が進んでいくのかが一目で分かる「道案内」のようになっており、大変分かりやすいです。今年度の実際の交流事例を拝見しましても、1回限りの訪問ではなく、必要に応じて2回目以降も継続して同じ専門職が訪問されているという記録があり、このような活用がなされていること、そしてそれに応えてくださるセンターという組織ができたことは、改めて大変嬉しいことであり、ご尽力いただいた先生方には心から感謝申し上げます。今後必要な方にしっかりと届く相談窓口であり続けることを願っております。

また、保幼小連携と発達・子育て支援の部会間でぜひ共有したいことが一点ございます。保幼小連携資料の4ページに「めざす子ども像を共有しながら」という文言がございます。私たち大人全員が同じ子どもたちと接しているわけですので、部会は分かれていても、どのような子ども像を思い描きながら取り組んでいるのか、その核となる部分を一本化して共通に作り上げていく必要があるのではないかと感じております。

会長： 様々なご意見をいただき、ありがとうございます。小学校の校長先生をされている立場として、この移行支援シートの活用について実感はいかがでしょうか。

委員： シートの活用はこれから導入が進んでいく段階かと存じます。公立のひがしうじ幼稚園は作成当初から携わってこられており、中心的な役割を果たしていただいておりますが、民間園に関してはこれから本格的に導入されていくことになります。研修計画にも組み込まれておりますので、これから活用が広がっていくものと考えております。

会長： ありがとうございます。研修の10番目に「この支援でよいのでしょうか」という具体的なエピソードを基に語り合う研修が企画されておりますが、そこでは発達観についても深く掘り下げていければ良いのではないのでしょうか。

副会長： 委員がおっしゃった「目指すべき姿」についてですが、それが内面的なわくわく感なのか、あるいは具体的な到達目標なのかという点には多様な意見があって然るべきです。結果を急ぐのではなく、じっくりと時間をかけて共通認識を育んでいくプロセスこそが大切であり、今後もそれを大切に進めていきたいと考えております。

会 長： ありがとうございます。園訪問や移行支援シートにつきましても、委員からご意見があったように、今後も周知に努める必要があります。必要な方に届く周知方法について、センター側ではどのような工夫をされておりますでしょうか。

事務局： 移行支援シートにつきましては、昨年度より書き方や活用方法についての研修を実施し、その動画をインターネット環境上で公開しております。保護者の同意が必要なシートであるため、どのように同意を得るかという点は重要です。周知方法につきましては、書き方の研修に加え、今後にも必要な方に広く活用いただけるよう事例を集めながら検討してまいります。

会 長： ありがとうございます。フローチャート等も作成され、仕組みが見える化されてきましたね。今後も運用と改善を繰り返しながら、子どもたちの未来のために役立てていきたいと思います。

事務局： 園訪問支援や移行支援シートのご案内につきまして、保幼小連携のチラシのように、QRコードやホームページへのリンクを作成し、各園や保護者の方が手軽にアクセスできるようにさせていただくというのはいかがでしょうか。保幼小連携のチラシと統一感のあるデザインにできればと思います。

また、園訪問支援につきましては、専門職ではないセンター職員も各園を回らせていただき、状況の確認を行っております。その折に、専門職による訪問支援や移行シートについてもしっかりと説明できるよう努めておりますので、今後も広く活用いただけるようセンターとして取り組んでまいります。

会 長： ありがとうございます。保護者向けには、専門職向けのものとはまた仕様を変え、パッと見て分かりやすいチラシを作るのも一案かもしれませんね。

それでは本日の委員の皆様のご意見を踏まえ、次年度も3つの専門部会を設置し、引き続きご検討いただきたいと思います。

次に、報告事項の「令和8年度の架け橋ブロックについて」、事務局より報告をお願いします。

3 報告

ア 令和8年度の架け橋ブロックについて

- ・事務局より、資料に基づき説明

会 長： ありがとうございます。ただいまの報告につきまして、ご意見はございますでしょうか。

委員： 架け橋ブロックの「にしおぐら」への統合についてですが、対応する就学前施設が多くなることについて、調整が大変になるかと存じます。センターの支援を期待しております。

事務局： 事前に各園のご意見を伺っております。調整等に係る負担を考慮し、センターとしても関わってまいります。まずは今年度この形で実施し、全体を見直していくことも含めて対応してまいります。

会長： 地理的な近さや校区という観点からも、これまでの延長線上にある統合といえそうですね。

それでは次に、報告事項「令和８年度取組（拡充）」についてお願いします。

イ 令和８年度取組（拡充）について

- ・事務局より、資料に基づき説明

会長： ありがとうございます。ご意見をいただけますでしょうか。

委員： 「市内療育施設」という主語がございますが、具体的にはどのような枠組みで考えておられるのでしょうか。

事務局： スーパーバイズやインクルージョンの推進にあたり、これまで宇治市内で長年実施していただいている４つの施設を中心として進めていただくことを想定しております。

会長： この取組は専門部会での議論というより、センターのミッションとして市が主導するものという認識でよろしいでしょうか。

事務局： はい。市として必要な施策として議会に予算案をご提案させていただいております。可決されましたら、センターの取組と連携して実施していきたいと考えております。

会長： 専門職同士のネットワーク作りにも資する取組ですので、ぜひ進めていただきたいと願っております。

４ その他連絡事項

会長： 委員の皆様、１年間大変お忙しい中、専門部会にもご出席いただき、宇治市の子どもたちのために率直なご意見を賜り、誠にありがとうございました。現

場の実践と行政の視点が重なり合うことで、実りある取組ができたと強く実感しております。

事務局より連絡事項をお願いいたします。

- ・事務局から推進協議会の委員任期及び次年度の委員推薦について説明

会 長： それでは以上をもちまして、令和7年度第3回目の協議会を終了いたします。
本日はありがとうございました。